

## 弥生時代の竪穴住居跡

調査区西側から、弥生時代後期と考えられる竪穴住居跡が確認されています（裏面図水色）。小型で楕円形を呈するもので、中央から地床炉が確認されています。

この住居内や周辺からは、交互に刺突が施される土器や、縦方向の縄文が隙間を空けて施される土器が出土しています。これらの遺物からこの住居跡は弥生時代後期のものと考えられ、これは青森県内では珍しい時期のものです。



SI10完掘

## 平安時代の土師器と須恵器

竪穴住居跡や土坑、溝の中からは土師器が多く出土しています。一方、須恵器の出土は少なく、現在当遺跡では竪穴住居跡（SI11）の床面に埋められた状態で出土したものなどが確認されています。



SI03内土坑



土師器出土状況



須恵器出土状況

## 平安時代の鍛冶炉と鉄製品

竪穴住居跡の床面などから、土が赤く焼けた焼土遺構（鍛冶炉）が確認されています。焼土遺構の近くからは、金床石と呼ばれる叩いた痕跡がある礫が出土しました。また、土坑やピットの中から鉄滓（鉄を取り除いた不純物）や羽口（鉄作りの時の送風管）が出土した例もあります。

これらは鉄製品作りに関連した遺構・遺物と考えられ、鉄製品も複数点出土しています。



SI03内焼土遺構（鍛冶炉）



鉄滓出土ピット



鉄滓出土状況

本年12月7日（土）・8日（日）に、青森県総合社会教育センターで開催される青森県埋蔵文化財発掘調査報告会において、今年度県内各所で行われた発掘調査の成果を報告する予定です。併せて出土遺物も展示します。詳細はホームページ等でご確認ください。

林ノ脇遺跡  
現地見学会資料  
令和元年8月31日発行  
青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15



## —縄文時代の狩場・平安時代の集落—

はやしのわき

# 林ノ脇遺跡

現地見学会資料

主催：青森県埋蔵文化財  
調査センター  
令和元年8月31日（土）

## 林ノ脇遺跡の概要

林ノ脇遺跡は、横浜町役場から東に約1km、標高約20mの段丘上に位置し、北には太郎須田ため池と平山沢の支流、南側には三保川を望みます。

遺跡の存在は以前から知られており、発掘調査の結果、縄文時代・弥生時代・平安時代の複合遺跡であることがわかりました。

この調査は国道279号道路改築事業（下北半島縦貫道路建設）に伴うもので、調査期間は4月23日～10月30日の予定です。

## 調査の成果

調査では、縄文時代の溝状土坑（落とし穴）28基、土坑1基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡17軒、土坑33基、溝跡7条、焼土遺構7基などの遺構が確認されました。また、これらの遺構に伴い、縄文時代・弥生時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・石製品・鉄製品などの遺物が出土しました。

また、縄文時代早期の押型文土器、三角形の磨石の他、さらにその下の層からは、より古い段階の石器が出土しています。



作業風景



※青森県遺跡地図 (<https://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/isekitizu.html>)  
青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財グループ作成の遺跡地図に加筆

## 平安時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡は、17軒確認されていますが、その中で大きさや形、カマドのつくりと方角といった規格や重複関係から、2つのタイプがあることがわかります。

一つは一辺4mほどの小型で、張り出しがあるものが多く、カマドの煙道が半地下式で住居外に出るタイプです（右図黄色）。このタイプは掘り込みが深いものが多い傾向があります。



SI09完掘

もう一つは一辺8mほどの大型で、カマドの煙道がほぼ住居内に収まるタイプです（右図ピンク色）。こちらは掘り込みが浅いものが多いです。この中には拡張された竪穴住居跡もあります（SI03）。



SI03完掘

カマドは小型タイプの方が大型タイプよりも袖などの残りがよく、袖石が確認されたものもあります。



SI09カマド



SI03カマド

ほとんどの住居跡で10世紀前葉～中葉に降下した火山灰がブロック状に堆積しており、住居は降下以降に作られたものが多いと考えられます。



## 縄文時代早期前葉以前の遺物

調査区東側では、ローム（赤土の層）の直上から縄文時代早期前葉の押型文土器や、縄文時代早期と考えられる断面形が三角形の磨石が出土しました。

さらに掘り下げたローム層中からは、エンドスクレーパーや石器を作った際の剥片が出土しており、より古い段階のものと考えられます。

土器・石器どちらも左図のオレンジ色の範囲でまとめて出土しています。



スクレーパー出土状況



押型文土器出土状況

## 縄文時代の落とし穴

調査区北側・南側では、細長く深い溝（溝状土坑）が28基確認されています（左図緑色）。深さは1m以上のものもあります。

これらは落とし穴に使われたと考えられており、Tピット (trap pit) と呼ばれています。斜面の落際である調査区南側では、列状に並んで確認され、動物を追い込む狩りを行っていたと考えられます。



溝状土坑完掘



落し穴による少人数狩り。おもしろい通り道に落し穴をつくりました。伊豆 縄文時代早期前葉の遺物